
最果ての理想論

鶴来絵凪

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

最果ての理想論

【Zコード】

Z4279Z

【作者名】

鶴来絵凪

【あらすじ】

最初は、ただこの日常が続いて行くのだと信じて疑わなかった。あの工口ゲのように、あのギャルゲのように、ただこの日常パートをこなしていくはずだった。

それなのに

たった一つのキーワードが、たった一つの些細な行為が、「俺」と仁科蓮を非日常パートへとシフトさせた

「黄金比」のキーワードの元、天使を背負う魂が理想を巡つて疾走する。

「何故黄金比は誰しもが普遍的に美しいと感じるか知ってるか？」
「？」

「黄金比を越えたその先に、理想郷 イデア が存在しているから
だ」

「厨一、乙ツ！…！」

命題〇・起碼のプロローグ（前書き）

ども、本当に久しぶりに「なまつ」に来ました…
鶴来です。

いや～…

久しぶり過ぎてパスワードを忘れるところ失態…（爆）
まあなんとか、そんな試練（主に血業血縛）を乗り越え、戻つてきましたw

未熟で至らないことが多いですが、暖かい田で見守つていただければ幸いです。

命題〇・起點のプロローグ

……チユン……チユン

東向きの窓から差す春の朝日が、新しい日々が始まつたことを教えてくれる。

そんな爽やかな朝を、俺は迎えた かつた。

現実を言おう。

まず俺の部屋は西向きの窓しかない。
よつてこの部屋、冬は猛烈に寒いし、夏は夕日がソーラービームを鮮やかに放つてくる。

まあしかし、今は4月。

そんな先々の苦しみを今嘆いても仕方ないだろう。

そしてさらなる現実を言つと

俺の目覚めは爽やかなんかじやなかつた。
といつうか、そもそも目覚めも何もない。
なにせ、寝ていないのでから。

目の前にはパソコン。

そこでは、まあアレだ。

18禁と呼ばれる種類に属するゲームのイベントが絶賛展開中だつた。

因みに俺は16歳なのだが

まあ、俺はこの感動のストーリー見たさでプレイしているのであって、決して性的欲求を満たすなどといった動機でプレイしているわけではないのだから別に良いんじゃないだろうか。うん、きっといいはずだ。え？

その動機の割には部屋のティッシュのゴミが多いなって？

黙れ小僧！！

俺にだつて色々あるんだよつ！！

16歳でエロゲやつてナニが悪いといつのだつ！！いや、悪くない！！多分！！

と、

「一人でナニを開き直つてるんですか？」

というやや冷えた声。

ドアをゆっくりと開けながら入ってきたのは……何を隠そう、俺の幼なじみだった。

名前は長月 奏香。

丁寧な口調や佇まい、そして愛くるしさも含んだ綺麗な顔立ちで学校内でも人気が高い少女だ。

ただし、そのキャラは学校にいるときだけで、俺といふときはそれはそれは激しく俺に迫つて

「ぐほおうッ！？」

こんな調子で俺に竜巻旋風脚をたたき込んでくる。

「……俺が何したつていうんすか、そーかさん……」

「その様子を見てまたゲーム三昧で徹夜したのが察せられたからといつて、言い知れぬ嫌な感じがしたからです……」

ため息混じりにそう返されたが、言い知れぬ嫌な感じつて……

どこのエスパーですか。

……といふか待てよ。

「おい、そーか。お前どうやってここに入ってきたんだ？　俺、鍵閉めてたはずだし、今は俺しか居ないはずだぞ？」

今、俺の父親は出張中だ。

母親は実家に帰ってるし（決して離婚前の修羅場でないことを親父の名譽のために記しておく）、それ以外に家族はいない。よつて、そーかに鍵を開けることは出来なかつた筈なのだが……。

「蓮君のお世話を頼まれていたので、この家のキー、予め蓮君のお母さんから預かつてましたから。」

「なん……だと……ッ！？」

俺のＫＯＹ作品を預かつた……！？

急いで俺は背後を振り返り、元は本棚、現工口ゲ収納棚を確認した。

「……全部揃つてゐるだ。」

「何を驚いたのかは知りませんが、キーつていうのは、家のキーのことですよ！？」

「なんだ、ややこしい。」

「ややこしくしているのはどつちですか！？」

「まさか俺だとでも言つのかい？」

「あなた以外に誰がいるんですか！？」

「……そーか。」

「今のは納得の『そーか』ですよね！？　決して私の名前を言つたんじやありませんよね？」

「まあ、落ち着けつて。何もスカートの中身を見せ付けるくらいうらなくともいいじゃない。」

「！？」

顔を真っ赤に染め、慌ててスカートを押さえ込むそーか。

「嘘だハブア！？」

今度は全身をバネのようにして放つてきたアッパーを顎に食いつ俺。
「変なところで嘘付かないでください……」「……悪かったよ……。」
「してもお前……最近俺を殴りすぎじゃないか？」

「自分が原因であることを自覚して下さい……！」

「僕は悪くない。社会の根底がダメになってるせいなんだ」

「一ートみたいな発言はしないッ！」

「あーあ、働きたくないなあ……」

「完全に言動が一ートのそれになつてますよー。」

「ところでシンジ君。初号機に」

「そのゲンダウじやあつませんっ……！」

そうやって、だらだらと高校生活最初の日が始まった。

命題1・理想論への離脱点

あの後、そーかに「ガミガミ」言われつつ、無理矢理そーかを部屋の外に出しつつ、それでもなお部屋に侵入しようとするそーかに
「今から着替えるんだが、そんなに俺の裸が見たいのか」と言つて撃退しつつ、Hロゲを片付けつつ、学校の制服に着替え終えた。

この間、およそ5分。

……せつかちなそーかのお陰か何なのか、最近手際がよくなつていることに気付き、複雑な気分になる。

「ま、いいか…」

現在時刻は7時半。

これならゆっくりと歩いても学校には余裕で間に合つだらう。たとえ歩くのがとても遅いそーかを連れていても、だ。
以前もこんな風にそーかが奇襲を掛けてきたときがあつたのだが、その時はそーかの足の遅さ、スタミナの無さのせいで新学期早々そろつて遅刻という間抜けなことをしでかしたのだ。

さらに…俺自身はそんな気はさらさら無いのだが、どうもそーかは疑心暗鬼なところが有るらしく…

俺が自分ことを置いていくのではないかと思つたらしく、通学中ずっと腕にしがみ付かれたのだ。

結果「腕を組んで一緒に遅刻なんて…ヤツら、デキてるやつ」と1週間も噂された。

そして俺の男友達は皆キレた。

つこでにこうとそこつりとは縁も切れた。

そんな感じで…そーかと登校する時は時間に余裕を持たないといけないことを学んだ俺は、朝食を食つのもそこに家を出た。

……にしても鍵と俺の世話を託された人が、結果的に俺の朝食時間を削つてゐるのもなあ…
いかがなもんでしょう?

学校に付くと、そこには既にチラホラと知つた顔が見えた。
知つた顔の殆どはこの隣で二コ二コしているそーかのせいで縁を切つた男ばかりなんだが…
まあ、それはいいとして。

「盛大だな…。」

そう思わず呟いてしまつほどに、入学式の会場は華美に飾り付けられていた。

「なんと言つても、ここは校訓は『何事も全力で』ですし、全力で歓迎してくれているのでしょうか…」

とそーかは言つが…

その校訓、どこぞの熱いテニスプレイヤーが叫んでそつだぞ…。

つーか校舎の壁にデカデカと吊されてる横断幕の中に

「もつと熱くなれよお…!…」

つて書いてあるのは完全に狙つてきてるよな。

校舎に入つて教室を確認すると、幸か不幸かそーかと同じクラスだった。

「わあっ！…蓮君、おんなじクラスだよっ！…良かつたね…」

「あ…ああ……」

今、口では肯定しましたがそーかせん。

殺到する背後からの視線（主に男の）に殺されそうなので公共の場でそういう事言つの止めませんか？

遅刻したわけでも、腕を無理矢理組まされたわけでもないのに、入学早々敵を作っちゃってるんですけど…。

クラスに入った瞬間、俺は自分の人生の幕引きを感じざるを得なかつた。

普通は幕開けの筈なのに。

概要を詳しく説明しよう。まずクラスの男のメンツが揃いも揃つて俺と縁を切ったヤツらだった。

で、そーかと一緒に登校したのを知ったヤツらは（どくべく（そーかに見えない場所で）嫌がらせをしてきた。

俺の席のイスにいつの間にか画ビヨウが仕掛けられていたり、カバンの中に消しカスの山を突っ込まれていたり、そもそもカバンもイスも無くなっていたり e t c e t c . . .

これが入学式1日で行われたと言うのだから驚きである。
団結力と機動力の恐ろしさを身を持つて知ることになった。

その後もさらに、一日中何者か（恐らく男）による嫌がらせを執拗に受けた俺は、さらなる被害を防ぐべく一緒に帰ろうとするそーかを「用事があるから」と言って何とか先に帰らせ、家路に付こうとしたのだが…

下駄箱から出した靴ん中に画ビュウ。

「……はあ……」

時間が経てば鎮火するもんなんだろうか、この炎上。マジで涙目である。

「全俺が涙したわ……」

そんな絶望感を抱えつつ昇降口を出ようとしたその時だった。

「……うん？」

一つ、妙なものを発見した。

当たり前だが、昇降口にはドアがある。

その内の一つのドアのガラスの部分が……なんだろう、波打つているような感じになっているのだ。

意味が分からないかもしれないが、あたかも……そのドアだけが、ガラスではなく水がはめ込まれているような……

ガラス本来の固さは無く、触れれば液体同様に殆ど反作用も無くすり抜けてしまうような……

そんな感じに見えた。

で、好奇心に駆られた俺はそのドアに近寄り、ガラスを確認するべく触れてみるとした。

(…お?)

触れてみると、本当に液体みたいな感触だつた。いや、水のような抵抗すらない。

どちらかといふと、シャボン玉の膜が張つていていのような感

「……！？ おー？」

……抜けない。手が。

……ある程度奥まで差し込んでしまった右手首から先が、全く抜けない。

「な……は……！？ 抜けねえぞ？！」 グイグイ引っ張つてみても抜けない。

いや、それどころか

「ぬおおおうつ！？ なつ……引っ張られて……る……！？」

まるで窓の向こう側から引っ張られているかのように、俺の右腕がガラスに吸い込まれていく。

しかし、窓の向こう側で俺の手を引っ張る人は見えない。

それどころか、貫通しているはずの俺の右手すら見えない……！！
いよいよ俺の右腕全てが窓に吸収され、窓ガラスは肩にまで至っていた。

(どおいつ……ことだよッ？)

窓ガラスは俺の腕が吸い込まれた場所を中心に、あたかもそこが水面であるかのように波紋を広げる。

そして肩が完全に窓に吸い込まれ、右耳が窓に吸い込まれたとき

『ふむう……全く……ここまで強情に拒まれたのは初めてじゃの……』

その声を聞いたのを最後に、俺の意識は飛んだ。

命題2・核精製者の逆鱗（ヒドヤ顔）

もしその光景を見た人がいたなら、驚き、恐怖の余り言葉を失つただろう。

そして、その光景を今までに見た人がいた。

長月奏香。

他でもない、たつた今全身を窓に吸収された少年の幼なじみである。先に帰れとは言われたものの、やはり一人で帰ることは出来ず、ましてや少年以外の人間と一緒に帰る気はさらさら無かつた。ゆえにずっと校門で待っていたのだが見てしまった。

幼なじみの少年が、窓ガラスの奇怪な波紋へと消えていくのを。

しかし。

少女の瞳には驚愕も、恐怖も映つてはいなかつた。

代わりにあつたのは、絶望と自責の眼差し。

それが何を意味して、そして何を思つてその瞳を潤ませているのか、それはまだこの少女以外知るよしの無いことである。

「…………うん……？」

朝起きると蜘蛛に変身していた、なんて話もあつたなあ……と思いつつ、俺は目を開いた。

全身を見渡すが、どうも蜘蛛になつてゐる箇所は無さそうだった。念のため、本当に念のため、そつ、決してノリノリではなく、むしろ嫌々、手首から蜘蛛の糸を出す某アメリカンヒーローのポーズを

取るが、変化無し。

「……。」

自分がバカらしくなった俺は、どうじょりもなくとつあえず空を見上げた。

「……いい天気だな……」

そう、本当にいい天気だった。

雲一つ無い空、灼熱のように降り注ぐ日光。

まさに常夏といった感じである。

足元に砂を落とすと、綺麗な砂粒がサラサラと風に飛ばされていくのが見える。

その砂を手で追うと、実は足元だけでなく、そこかしこの地面が砂に覆われ、その砂の波がどこまでも続いているのに気が付いた。純粋な砂のみで作り出される緩やかな波や山。

そう、これはまさに……

「……や、砂漠…………？」

窓の液状化に続く超展開っぷりに、付いていけない俺がいた。

「と……とつあえず……辺りの状況を確認……」

するまでも無い。

自分で言つて何だが、砂しか無い場所でどうやって状況を確認しろと言つのか。

（液状化する窓ガラスに砂漠か……これで時計が溶けだしたら完全にモネの世界だよな……）

モネは世界的に有名な印象派の画家だ。

砂漠の中にドロドロに溶けた時計が転がっている絵などがよく知られているのだが……

「あ、明日美術だし絵の具忘れねえようにしないとなあ……って、

それよりこいつからどう帰るかが先だろつ……！」

沈黙。

「む……虚しい。」

俺こと仁科蓮、沈黙と虚しさで撃沈。

「つーかホント……どう帰ればいいんだよおおッ！……」

「教えてあげよっか？」

「ぬああ！？」

背後から唐突に声が聞こえ、驚いた俺はその場に尻餅をついた。

振り返った先にいたのは、一人の少女。

身長は……140くらいだろうか。

青っぽい髪の毛をショートに切り、ヘアバンドで止めていて、活発な印象を受ける。

さつき見渡した時はこんな女の子は居なかつたはずなのだが……。しかし、単なる見落としでないことも明白だ。

何故なら……まずこの少女の存在感を見落とすことはあり得ない、そう思われるほどにこの少女は可愛らしかつたのだ。

そーかの、どちらかといえば「綺麗」や「お淑やか」に分類されるような「可愛らしさ」とはまた違つた魅力を持つ少女が、そこにはいた。

「だツ……誰だお前！？　つーかいつからそこにいたんだよ！？」

「え？　うーん……アンタが某蜘蛛人間のヒーローのポーズをしていたあたりかしら。」

「最悪のタイミングじゃねーかっ！　つーかどこに隠れて」

「質問なら後で答えるから、今はちょっと黙つてて。　アイツに喰われたくないんなら、ね。」

直後。

俺の背後で爆音が轟いた。

「…………！」

「はん……ああやつてそこいらじゅう攻撃して、対象を炙り出す作戦つて訳か……。

……にしても、攻撃する場所が見当違いにも程があるわね。また、見たところE S Hで場所を特定する技みたいだし、仕方無いつちや仕方無いか。」

不敵に微笑む少女の隣で、情けなくも尻餅をついたままの俺。そして、爆発で飛び散った砂煙が薄れ始めたとき俺の目に映つたのは「なんだよ……あれは！？」

薄れていく砂塵の中に浮かぶ一つの巨大な陰影。

そして、その真ん中には巨大な影と対を為すかのように小さく光る点が一つ。

そして　その光る点が巨大な影の双眸であることに気付く程に砂塵が薄れ　遂にそいつの全貌が現れた。

化け物。

トンボのように透き通つた羽。

体にはムカデのように大量の節が有り、その節の全てから　本來ならば節足のあるはずの場所から　　触手が生えている。

グロテスクという言葉がしつくり来る容貌に加え、その目玉が人の目のように白眼を持つてギョロギョロと動くのがさらにその異様さを増している。

「化け物……。」

「そう、化け物。それも人間が作り出した代物よ。言つなれば『恨みの本質』。」

「恨みの……？』

「そ。まあ、詳しいことは後で話すから……今はアソツを潰さないとね。」

「潰すってどうやって……」

と訊こうとして少女の方を見ると、何やら妙なポーズをキメ始めた。

「『力で』に決まってるじゃない。」

そういうと、少女は右手を前に差し出して何かを掴むような動作をし始めた……

そして、俺は気付いた。

気付いてしまった。

ああ、俺は同じような光景を見たことがある、と。

だから俺はおもむろに立ち上がり、少女の両肩に手を優しく置いた。

「……大体理解した。今の状況と、お前の言っていることも。」

「ふえ……っ！？ な……何で……！？ い、いきなり何を……？」

突然両肩を捕まれて驚いた少女はキメていたポーズを解き、茫然とした様子でこちらを見上げてきた。

うむ、俺を見上げる程度の身長差からして、大体年齢的にもあっていい。だから、俺は確信を持つて話を続ける。

「わかるさ。コイツは誰もが皆通る道だしな。特に、この厳しい現代を生き抜く為には。」

少女はハッとした顔になると、思い当たる節があるかのように俯いた。

「だから自分に自信を持つていい。誰になんと言われようと、お前は今までいていいんだ。」

今度は俯いた顔を再び上げ、こちらを見ている。

この反応を見るかぎりどうやら、俺の思った通り、図星らしい。

「結果や後悔は後ですればいい。今は、今のお前が決めるべきなんだ。だから何をしようとお前は、お前だ。誰かがそれを否定するなら、その分だけ、いや、その何倍にだって、俺が肯定してやるよ。」

そう優しく語り掛けると、そして少女は膝から崩れ落ちた。
……どうやら、セラピーは成功したらしい。

厨二病の。

あのキメポーズは、かつて俺が厨二病を発病していたときにしていた変身ポーズと類似していた。

そしてさつきからしている若干高飛車な発言。
そして身長的に見て恐らく彼女は中学2、3年生だろう。
状況的に見て、彼女が厨二病発症者であることは明瞭だった。
だから、俺はさらに続ける。

「厨二病は恥ずかしいことじやない。だからもう泣くな。」

「…………はあ？」

怪訝な顔で見上げる少女。

そして、その顔が徐々に赤らんでいき、しまいには眉毛が逆八の字を描いた。

「…………あれ？」

やつぱダイレクトに厨二病って言つのはマズかったか？

「ああ、ごめん……やつぱ厨二って言葉には抵抗があるよな、ごめん
ごめんツー？」

突然少女は崩れ落ちてしまがんだ状態から飛び上がり、その勢いのまま俺の顎に頭突きを見舞つて來た。

そ…………そんなに厨二って言葉が嫌いだったのか！？

「わ、悪かった！！ 次からは別の表現を使うから…………」

「…………んかじやない……」

「え？」

「私は厨二病なんかじやなああああいツ…………」

突如少女がポケットから出したのは、人類の叡智を色々危険な方向

に集めた最新モデル　かのアメリカでは民間で自由に取り扱える
ブツ
拳銃。

「なつ！？　ちょつ！！　物騒だからしまえって！！　モテルガン
でも改造してあると結構危険なんだぞ！？」
「……………」これは…モノホンよおお！……！」

少女の頭で、何かがブチッとキレたような音がした。
それと同時に、こちらに銃口を向け、引き金を引く少女。

渴いた破裂音とほぼ同時に、空気を切り裂く音が耳たぶのすぐ横を
通り、そして俺の背後　位置的には先程化け物がいた場所　へ
と、銃口から放たれた亞音速の物体が飛んでいき…………

雷が落ちるような轟音が鳴り響いた。

「…………は…………？」

何がどうなったのか全く理解出来なかつた俺は、先程放たれた銃弾
の迎つた先を見やると

巨大なクレーターが砂漠のど真ん中に形成され、そのクレーターの
中央部分に先程の化け物が…………

見るも無惨なウェルダン仕立ての屍に変貌していた。

口を開けにしたまま言葉が出てこない俺。

そんな俺に、少女は勝ち誇つたように宣言してきた。

「私は笠音詩乃。こっちの世界においては『核精製の狙撃者』コア・
スナイパー』の異名を持つ、れっきとした能力者よ。」

そう言って、銃口から未だ立ち上る煙をフツと一息吹いて「キマつ
た…………」という表情をしている彼女　笠音詩乃を見て、やは

り俺は思った。

ああ……診断されたの厨二病だコイツ……

命題2・核精製者の逆鱗（ヒドヤ顔）（後書き）

これまでの登場人物

仁科 蓮ニシナレン

主人公。エロゲーマーにして鈍感。

妙な方向で豊富な知識を持ち、事態に臨機応変に対応する能力を持つ。

だが、社会を生き抜く知恵とか良好な人間関係を築く能力は皆無で、その点においてはバカと言える。

ナガツキソウカ
長月 奏香

蓮の幼なじみ。

しつかり者で、常々暴走する蓮の世話係。
せっかちな性格の割にのんびりとしか行動出来ないと「ジレンマ」を抱えているため、ドジをすることもしばしば。
しつかり者のドジっ子。

蓮からは「そーか」と呼ばれている。

野郎ども

蓮と奏香のクラスメートで、奏香のファンクラブ会員メンバー。
奏香と行動を共にする蓮を敵として認識しており、学校全体を対蓮用ブービートラップ要塞にする計画を立案中。

笠音詩乃カサネシノ

異名は「核精製の狙撃者」コア・スナイパー。
五大元素の核を精製する能力を持つ…らしい。

それを弾丸の形に変えて拳銃に装填・発射して爆発的な攻撃を敵に

「えりれる……らしー。

蓮曰く「末期厨二病患者」

設定がきちんと書けてない中で超展開がずっと続いてますが、次の命題3で説明するのでしばしお待ちを…！

(命題3に続く)

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4279z/>

最果ての理想論

2011年12月17日23時04分発行